

和文抄録

幼児を対象とした疾走能力を評価するテストにおける疾走距離の検討

順天堂大学
スポーツ健康科学研究科
学籍番号：4118016
氏名：小峯 功一

【目的】

本研究は、幼児を対象とした疾走能力を測定する際の疾走距離の検討を行うことを目的とした。

【方法】

幼児 188 人を対象とし、実験は、年少児、年中児は 25m 走、年長児は 30m 走を行い、5m 毎の疾走タイムを測定した。分析項目は、25m 走タイム、最大疾走速度、疾走速度逓減率とした。また、新体力テストの測定に基づき短距離走の特性が考慮される疾走距離の検討を行った。

【結果】

その結果、0-5m 区間を除きすべての区間で学年が上がるにつれて疾走速度が増加しており、5m 以上の疾走距離であれば発育発達の差を表現できると推察された。また、速度逓減率の観点から年少児は 20m、年中児および年長児は 25m の疾走距離で、8 秒以内に疾走を終了することで短距離走の運動特性を保つことが可能であると推察された。信頼性の検討について、級内相関係数の値は測定距離や学年に関係なく高い値を示した。

【結論】

以上から幼児を対象とした疾走能力を測定する際の疾走距離は、年少児は 20m 走、年中児および年長児は 25m 走が望ましい距離として挙げられた。